

地域コミュニティと排除をめぐる調査方法論

松宮 朝*

Communities and Social Exclusion in Social Research

Ashita MATSUMIYA

キーワード：地域コミュニティ，排除，調査方法論

Communities, Social Exclusion, Social Research

1. 地域コミュニティの強化と排除をめぐる

近年、地域コミュニティに対する政策的な関心と期待が高まっている。特に、社会福祉の領域においては、介護・高齢者福祉を中心に、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目標に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域の包括的な支援・サービス提供体制である地域包括ケアシステムという枠組みが提起され、地域コミュニティに中心的な役割が期待されている（加藤・有間・松宮，2015，2016）。さらに、厚生労働省が中心となって旗揚げした「我が事・まる事地域共生社会」の取り組みでは、「高齢者・障害者・子どもなど全ての人々が、1人ひとりの暮らしと生きがいを、ともに創り、高め合う社会」、「対象者ごとの福祉サービスを『タテワリ』から『まるごと』へと転換」することが謳われ、より一層、地域コミュニティへの期待が寄せられている状況だ¹⁾。

こうした地域コミュニティへの期待は、地域の強みを生かしつつ地域で解決する力を、地域の共同性を基盤としながら、さらなる組織化によって発展させることを求

めるものである。ここでは、現代社会の様々な問題に対して、地域の強み、すなわち、地域で暮らす人びとが築き上げてきた共同性の強みをどのように発展させていくかが課題とされている。

このような政策動向に一定程度影響を受ける形で、さらに大学での地域連携・地域貢献が要請される状況（拙稿，2011）の中で、筆者も地域コミュニティによる課題解決の可能性を追求する研究・教育・実践にかかわってきた。研究・実践としては、後述するように、コミュニティの強化が引き起こす排除の問題を視野に入れつつ、愛知県西尾市における地域ベースの多文化共生の取り組みにかかわってきた（拙稿，2017）。社会福祉の分野では、愛知県長久手市、尾張旭市の地域福祉計画、地域福祉活動計画策定において、地域包括ケアシステムの構築を進める上での地域コミュニティの持つ可能性を検討し、地域包括ケアとコミュニティソーシャルワークの展開可能性について考察を進めてきた（加藤・有間・松宮，2015，2016）。また、教育における地域連携として、愛知県地域振興部、名古屋市立大学との連携事業である「あいち地域づくり連携大学」を2009年度より毎年開催し、愛知県長久手市、北名古屋市、大府市、知多市で、地域住民の参加促進、大学との連携、地縁組織の活性化、地域への愛着の醸成などをテーマに教育実践を進めている²⁾。

* 愛知県立大学教育福祉学部

いずれも、地域コミュニティの持つ可能性を最大限追求することを目指すものだが、筆者の取り組みを振り返ってみた場合、そのあり方に対していくつか根本的な疑念を抱くようになった。具体的には、地域の強み、機能するコミュニティが排除によって成り立つのではないか、そして、地域の持つ問題をきれいにぬぐい去ってしまう取り組みではないかという思いである。たとえば、地域福祉活動や計画策定のワークショップでは、地域によさ・強みを語り合い、今後の福祉的ニーズに対応した地域コミュニティづくりの方向性について意見を出し合うことが多く行われている。これは地域福祉を中心とする教育実践でも多く使われる手法だが、相互の批判を禁止するだけでなく、あえてネガティブな要素を取り上げず、地域の強みを強調するという、一種のストレングスモデルがベースにある。

こうしたワークショップの場面だけでなく、フィールドワークや、地域での講演、教育の場において、地域の強みだけでなく、地域の弱みを排除の言葉で語る場面に多く出会ってきた。外国人の増加に対して、「今は外国人やろくな奴が住んでいない」、「外国人の生活よりも日本人の方が大事では」といった声が寄せられる。また、公営住宅がない地域において、「誰でも入れる住宅がないことが、この地域の強み」という語りながされたこともあった。地域の強みとして語られることのなかにも、たとえば「母子世帯がないこと」などのように、地域コミュニティにおいてネガティブな要素がないとする言説が公然と語られることが見受けられた。地域の強みを語ることが、単純な排除の言説に連なるという問題と言えよう。

筆者はこうした問題を、地域コミュニティの力を強め、そのパフォーマンスを向上させるために、特定の層が排除されるという形で、様々な社会的排除に対する地域コミュニティへの期待が、逆説的に排除を呼び起こしてしまうジレンマとしてとらえてきた（拙稿、2017）。地域コミュニティの強化が、同一性を強いるプロセスを伴うことで、結果として排除を生み出すというジレンマであり、強いコミュニティ、何らかの機能を果たすコミュニティは、同質的で、凝集性が高い、あるいは高める方向性を内包し、逆に、弱いコミュニティは異質性が高く、凝集性が低いというアポリアである。

このアポリアは、日本の地域コミュニティをめぐる中心的な理論である共同体論、コミュニティ論、ソーシャル・キャピタル論の議論だけではなく（拙稿、2012、2014）、地域コミュニティへの期待の高まりに対応した近年の教育・研究・実践にも認められる。特に、先に見てきたような、地域の強みを探りだそうとする教育・研究・実践におけるワークショップなどの場面で、排除を組み込んでしまっているのではないかという疑念も浮かぶが、これは地域のネガティブな要素をあからさまに排除し、隠蔽するという『『地域』という神話』（西澤、1996）を、新たな形で引き寄せてしまうものだろう。

では、地域の可能性を語ることの背後にある、地域の問題を見据える視座を確保するために、どのような方法を用意しておくべきなのだろうか。排除を生み出さずに地域の強みをどのように生かすかというテーマに関する実践方法については、拙稿（2017）で論じてきたが、ここでは別の角度から、このジレンマを超える視座について検討してみたい。本稿では、この点について検討するために、吉田司による一連の「ノンフィクション」を参照点とする。それは、地域コミュニティの共同性について一貫してその問題と暗部を追及し、示唆に富む方法論を提起していると考えためである。以下では、地域共同体の恐怖（2.）、恐怖をとらえ、対峙する方法論（3.）を検討した上で、地域の実践、教育実践³⁾として受けとめるべきものを検討していこう（4.）。

2. 地域共同体の恐怖

吉田司の作品は、三里塚（吉田、1993）、水俣病（吉田、1987、1991）、沖縄（吉田、2000）、宮沢賢治（吉田、1997）など、聖化され、神話化された対象に対して徹底して虚像を解体する神話崩しの「ノンフィクション」⁴⁾として知られている。それは権力の側のみならず、それに対置される「民衆」の側の問題を暴くことで、独自の世界を構築している。もっとも、評価の一方で、徹底した神話崩しによる取材姿勢や戯作者的な文体から批判されることも多い⁵⁾。ここでは、吉田司の作品の内容ではなく、吉田による地域共同体の持つ恐怖の描出に焦点をあて、その意味を検討してみたい。

吉田司の仕事は、三里塚の記録映画で著名な小川伸介の助監督として三里塚にかかわることからスタートした(井田ほか, 1999; 吉田, 2002)。1968年の『日本解放戦線 三里塚の夏』以降、三里塚の農民と長期にわたって生活を共にしつつ7作製作された小川伸介による一連の記録映画は、農民闘争における反権力的な民衆の団結力と共同性を描き出した点に高い評価が寄せられている。しかし、こうした小川の記録映画に対して吉田は、反権力の農民による闘争という位置づけは欺瞞であり、実際は農民の共同性における負の部分を含棄した「小農民讃歌」であると批判する。その背景として吉田は、小川の実家が大地主で、小農民への贖罪意識から発しているためであると指摘し(井田ほか, 1999: 220; 吉田, 2001a: 14; 山折・吉田, 2010: 214-215), 「民衆は善、権力は悪」として美化する民衆像を作り出してしまったと批判するのだ。そして、こうした民衆像を描き出す暗黙のルールを破れば「民衆の敵」となり(吉田, 1993: 214), 「結局民衆の味方を任ずる者は民衆をリアルに描かない」(吉田, 1993: 216) 点を、「ラブレターの書き方」として問題視する。

吉田の批判には、その欺瞞を暴くだけでなく、美化して描かれた当の民衆にとっても望ましくないという認識がある。単に民衆礼賛では学ぶものがなく、民衆から何を学ぶか(吉田, 1993: 156)が重要であり、これに對置するのが、農民の闘いの姿をとらえる視点である。これは、吉田が育った山形の「一銭店」で体験した農民たちのリアルなおぞましい姿と、農村共同体の負の側面を凝視し続けた経験から生み出されたものであるという。こうした視点を持つに至った契機として、1969年に国際反戦デーのデモで逮捕され、10日間交流された際、カリエスで障害を持った父の記憶が胸の内に流れ込んできた情景を語っている(吉田司編著, 2003: 15-19)。

三里塚を去った後、農民とその共同体像を聖化し神話を生み出すことを批判する視点は、水俣での仕事に引き継がれていく。水俣では、既存の運動や支援活動とは一線を画し、運動が訴訟派と一任派に分裂する中で、若者の集まる居場所が吉田によって形成されていく(山口, 2013: 149-151)。さまざまな政治的対立を超えて1971年から若衆宿(スミス・スミス, 1980: 159)を主催する経験と、水俣での膨大な聞き取りから、2つの著作『下

戦記』(初版は1987年)(吉田, 1991)と『夜の食国』(吉田, 1991)を著した。特に『下下戦記』が1988年に第19回大宅壮一ノンフィクション賞を受けたことから、その仕事が広く知られるようになった。

この、吉田司の2つの著作について元濱(2012: 225-228)は、記録をめぐる理論と実践の視点から整理している。両著は同じ主題を扱っているが、「若き水俣病患者の自立拠点づくり(若者宿)を通じてする患者達の発言の聞き取りの記録、及び発言をうながし或いは可能にする条件、環境の整備(支援運動)から成立」する『下下戦記』と、「個々の事実、事例に新たなパースペクティブを与えて、記録のもつ物理的な時間の契機や空間的位置関係から離れて自由に再編される説明図式」に基づく解釈としての『夜の食国』⁶⁾というように、全く異なる性格を持つという。しかし、2つの著作に共通するのは、いわゆるチツソ=悪/民衆=善という図式を超えて、また、三里塚での仕事同様に、「民衆は善、権力は悪」とする図式を超えて、自ら主催した若衆宿での経験を丁寧に描き出し、農村共同体の恐怖を描き出したことにあると言えるだろう。

このような吉田のまなざしは、「日本中に巣くう、その暗黒で封建的で抑圧的な『ムラと農民の思想』(=日本の共同体の宿痾)と戦わねばならない」(吉田, 2001a: 15)という決意に基づくものである。いわゆる定型の語りとして「民衆」を聖化することをやめ、恐怖を描きたかったというのだ。つまり、「人生の希望でも絶望でもない。地に縛りつけられた者たちの宿命だ。生きていることの恐怖」(吉田, 1987: 334)を描き出すことである。

ここには、2つの恐怖が描かれているように思われる。第1に、地域共同体に生きる人びとの恐怖である。外部からの支援者や知識人たちが水俣の共同体を理想化するなかで(吉田編著, 2003: 40)、三里塚や水俣での経験から、民衆の共同性や反権力を賞揚する言説に対して疑問を投げかける(吉田編著, 2003: 29)。具体的には、昭和30年代に原因不明の伝染病・死病と恐れられ、村八分にされ(吉田, 1991: 418), 「共同体の恥部や暗部をあからさまに表現するもの」(吉田, 1987: 26)としての水俣病患者とそれを排除する共同体のあり方である。

「まあた伝染病ン所の娘が通り寄る」
 「見てえんな、^は早よ、^は早よ。今、あそこ足って逃
 げていくがな」
 「気色ン悪かッ。^{あるげ}俺家ン前は通んなッ。病気^う伝
 染^つたらどけんすつとな」(吉田, 1991: 18-19)

この「奇病八分」(吉田, 1991: 19)は、農民の持つ差別性、地域の大きな差別構造から生み出されたものであり(吉田, 1997)、地域社会の側から水俣病患者たちが「奇病」として恐れられ、排斥されるという差別と排除である(成, 2003b: 11)。ここには、農民の抵抗とは異なる、地域共同体の持つ恐怖を浮かび上がらせる吉田の視点がよく示されている。

第2に、地域共同体と民衆を聖化し神話化する言説の恐怖である。吉田は、地域共同体の暗部を隠蔽するまなごしを痛烈にあぶり出すとともに、「チッソ企業を加害者として、認定制度のフィルターを通して浮上してきた市民レベル被害者水俣病」において、「村八分の側に回っていた道義的責任はとりあえず棚上げし、水銀汚染の健康被害の罰金を支払えとする補償金水俣病」像を生み出した言説を批判する(吉田, 1991: 418)。そして、地域における構造的な差別があたかもなかったかのように処理され、「公害の聖地」化されていること、さらには、「情報共同体の〈聖なるもの〉の偽造を阻止する」ことを強く訴える(吉田, 2001a: 15)。言説レベルの恐怖を暴くことが、吉田の神話崩しの2つ目の特質と言える。

こうした2つの特質を持った吉田の作品は、当然のことながら激しい反発にさらされることになった。『下下戦記』は、1980年から『人間雑誌』に連載されるが、「患者家族の恥部を赤裸々に暴露したもの」として激しく抗議を受け、「厄災^{わざわい}の書」として7年間の沈黙を余儀なくされた(吉田, 1991: 411)。「水俣の恥部をあばいた」と非難(吉田, 1993: 31)され、水俣病患者への支援運動の側からも、「『公害の聖地・水俣』に間違っただイメージを植えつけ、認定申請運動に重大な障害を与えるものとして」猛反発を受けた(吉田, 1991: 411)。水俣病患者を描き出した傑出した作品である著名な石牟礼道子『苦界浄土』(石牟礼, 1972)⁷⁾が、水俣病患者を「聖なるもの」としてとらえる悲劇であるのに対して、そうした「^ゑなる患者像を嘲笑う、アナーキーでスケベーで、手の付け

られない下品な民衆喜劇」と見なされたという(吉田, 1991: 415)。

たしかに、水俣病患者に対する神話崩しを行い、また、独特の文体も相まって、大きな反発とともに受け取られたところもあるだろう。ここで注目したいのは、その仕事が単に欺瞞を暴くだけではないことだ。吉田は若衆宿での経験をベースに、丁寧に、執拗に、「ずっと深いレベルで補償金体制を批判し座り込もうとした闘い」(吉田, 1991: 413)を描き出していることである。これは、単なる神話崩しではない。共同体の暗部に目を閉ざしてしまう、あるいは、対象者を聖化して描くことで視野の外におきざりにしてしまう地域への生ぬるいまなごしを否定し、地域における闘いの持つ意味を描き出すものととらえることができるのではないか⁸⁾。そして、こうした地域共同体批判を可能にしているのが、次節で検討する吉田司の方法論である。

3. 恐怖をとらえ、対峙する方法論

過激な神話崩しによって、「人斬り吉田」という異名を持つ吉田司の方法論は、おそらく社会調査法の教科書的な教えに真っ向から挑む、禁じ手のオンパレードのようにも見えるのではないだろうか。たとえば、『夜の食国』での、調査データをバラバラに解体してフィクションとして作品化する手法(吉田, 1987)⁹⁾や、『ひめゆり忠臣蔵』における、抗議を受けて削除した箇所をあえて提示するという手口(吉田, 2000)に止まらない。度重なる抗議を受けたその取材手法は、現地の人びとのラポール、寄り添うという方法論とは大幅に逸脱しているように見えるかもしれない。また、「アームチェア(肘掛け椅子)・ノンフィクション」(吉田, 1993)、「コラージュ・ノンフィクション」(吉田, 2005a)の提唱など、一見すると、ノンフィクションの王道である「足で稼ぐ」式の地道な調査を真っ向から嘲笑うような方法論を提起することで、いわゆる「ノンフィクション」から大きく逸脱したという印象が持たれている。

もっとも、こうした華やかな言葉に目を奪われずに注視してみると、調査の方法論としての極めて正当なあり方と、さらには、いわゆる「正当」とされる調査方法論

の問題を乗り越える重要な視点を提起していることに気づかされる。ここでは、2つの点から見ていこう。

第1に、吉田司の聞き取りの手法である。まず、押さえておくべきことは、『下下戦記』において仮名で記された聞き取り結果の一部が、吉田の同意のもと、岡本達明による『水俣病の民衆史』に引用されている（岡本、2015）ように、上述のノンフィクション批判の論調とは異なり、記録として重要な位置づけがなされ、評価を受けていることだ。吉田による記録の特徴の一端は、『下下戦記』における下記の引用に示されているように思われる。

私と清市の間で最初に「長い語り」が成立したのは、患者の道と、死んだ妹の富子について清市が話した晩のことであった。その頃清市は、じぶんを「あだし」と言ったり「俺^{おる}」と言ったり、言葉の正確な、一定の使い方を知らなかったばかりではない。自分が心の中で想っていることを表現する言葉がわからぬので、よく言葉を造った。清市の造語の中で最も有名で、今も若い患者仲間の共通語として残っているのに、「てすとに」という言葉がある。「仮に」「試しに」「たとえば」「考えてみれば」というような、雑多な意味を付与されているらしいのだが、「適当に」という意味にもとれる。この言葉、清市その頃やたらと多発させた。そして、自分の造語だということすら、清市自身わかっていない。「てすとは、てすとたい」仕方なく私と敏が一晩頭をひねって考えたあげく、苦し紛れに、「てすと=テスト=試験^{てすと}に」と定めて、若い仲間に着させたのである。（吉田、1991: 10-11）

ここからは、若衆宿に集う若者たちとの関係形成とともに、その言葉を丁寧に聞き取り、言葉の意味を文脈からつかんでいく作業を見て取ることができるだろう。こうした聞き取りに基づいて、水俣の膨大な言葉が書き留められ、描き出されていることを確認したい。また、聞き取りだけでなく、その提示の面でも、手紙の文章をそのまま引用することで、書かれた文字の手触り・肌ざわりを示す工夫がされていることも重要な意味を持つと思われる（吉田、1991: 141-146；167-172）¹⁰⁾。

この点とも密接に関連する吉田の手法のもう一つの特徴は、ただ単に傾聴して言葉通りの意味を聞き取る手法とは大きく異なっている点である。具体的には、聞き取った言葉そのものではなく、その裏にあるもの、隠されたものへの注目である。「人の発する言葉ってあんまり信用できないところがあって、いつも本当のことってのは隠されてて、言葉にすると全部ウソなんだ、と思ってるから」（大月、1996: 74）というわけだ¹¹⁾。「だから、僕の取材方法ってのはバカッ話ばかりしてるの」、そして「そうやって頭にこびりついた何行かが僕にとっては問題なんで、事実とか真実とかを聞こうなんて思わない」（大月、1996: 74）と述べる。

こうした方法はどのように生み出されたのか。吉田は、水俣病患者の定型のうその語り、小川伸介の出身経歴を偽っていたこと（吉田、2001a: 85-86）、そして「語られる世の中の言葉を信じず、その裏にある人々の心根や掟の構造ばかりを透視したがる若者に育っていった」という生い立ちにあるとする（吉田、1991: 418）。以上の経験から、言葉そのものではなく、生きられた文脈にせまることへのこだわりを見ることができよう。さらに、こうした方法を支える手法として、語り出された言葉ではなく、人の行動、動作に注目することの重要性を指摘するのだ。

例えば、島村敏という青年が大風呂敷ばかり広げるところに彼の悲しみが堆積していることがわかるでしょう。また、彼らは思想を語れないから、体から観察するしかなかった。言葉の表現ではないんだね。目線、口ぶり、仕草の中に、彼らのイデオロギーが発見できる。イデオロギーというのは、何も滔々と「私は社会主義者である」と述べたてることではなく、人間の生きた思想であり、動作の中に表れる堆積されたものなんですよ。（井田ほか、1999: 220）

ここには、言葉の文字通りの意味だけでなく、身体に現れた意味の理解を重視する方法論がよく示されている。こうした身体に根ざした文脈を理解する方法論をベースにして、次に見る吉田のアクロバティックな議論が生み出されていることを確認しておきたい。

第2に、言説がどのように「事実」を作り出すかとい

う問題を視野に組み入れた方法論について検討しよう。吉田は、ノンフィクション作家として、足で稼ぐノンフィクションの時代は終わったと語る（吉田，2001a）。沢木耕太郎に代表される「足で稼ぐ」式のノンフィクションに対して、「恣意的に想像力を行使するのだ」（吉田，1993: 249）と述べ、その特質を“アームチェア（肘掛け椅子）・ノンフィクション”と呼ぶ（吉田，1993: 250-251）。さらに、『『嘘』がリアル世界を圧倒してパワーを発揮する』『電子情報化社会』において、筆者のデータベース上に存在する様々な資料からアトランダムに、恣意的に、個的に配列し、引用から、「大も小も、貧も富も、明も暗も、ぜんぶひっくるめて受け入れていくような方法論」としての「コラージュ・ノンフィクション」を提起する（吉田，2005a: 7-10）。徹底的な取材を基盤とした古典的ノンフィクションの時代は終わったと述べることは¹²⁾、どのような意図があるのだろうか。

この点について、先に述べた吉田による聞き取りの手法は、「身体障害者の父から学んだ知恵」（井田ほか，1999: 221）であり、「身障者の子と奇病の子の出会いの記録なのであり、共に異物視された苦い記憶を焼き捨てフツの娑婆に自立してゆくため」（吉田，1991: 10-11）の記録として見るべきという。このような身についた経験として考えた場合、「ひたすら人と時が隠し持つ謎と深層心理に向かって書き進む」（吉田，1993: 249）という、一見すると荒唐無稽に見える方法論も、吉田司という身体に裏打ちされていることに注意したい。前提として考えておく必要があるのは「水俣と三里塚の現地に入って生き抜いた表現者は私しかない」（吉田，2005b: 218）という厳然たる事実である¹³⁾。この点に注意してみると、吉田の一連の仕事は、単にランダムに事実を拾い集めて空中戦を展開していくという言説ではなく、実に吉田の生きた軌跡から生み出された言説の抵抗であることに気づかされるのではないだろうか。たとえば、水俣病への差別から、肺結核患者として宮沢賢治が受けた差別による解釈へと展開し（吉田，1997；山折・吉田，2010）、水俣のムラ社会の問題が、松田聖子のことを解釈する枠組みになる（吉田，1993: 86）。また、日本の「電腦化」、IT化をめぐるルポルタージュである『デジタル・パラノイア』（初出『ビル・ゲイツにあった日』1996年）においても、半導体の原料となるシリコン粒

子の純度を高める清浄技術を、1980年代にチッソ工場において金属シリコンを現場作業にかかわっていた経験から論じていく（吉田，2001b: 247-249）。すべて吉田の身体をもとにした、「コラージュ・ノンフィクション」であり、その基盤をもとにした議論の飛躍であることに注意したい。

大月隆寛はこれらの仕事の根本にある吉田の生身の力を、視野、眼の解像力、視点を確保する跳躍力（大月，2001: 33）と評価する。それは、「突き詰めれば『調査者』自身の問題である」、「まるごと」（大月，1997: 198）というべきものだろう。だからこそ、吉田司の一連の仕事からは、その型破りの方法論ではなく、地域にかかわり、生き、闘った経験に裏打ちされた文脈の基盤にこそ注目すべきと思われる。これは、フィールドワーク、地域での実践へのかかわりとともに、地域調査の教育をめぐる方法論としても、公民科教育をめぐる議論においても重要な点ではないだろうか¹⁴⁾。

4. まとめにかえて

本稿では、地域コミュニティへの期待が高まる中で、それを補強するような地域での実践活動と研究、教育のかかわりにおいて、地域コミュニティの負の部分に隠蔽する傾向を持つ点を問題視した。こうした傾向は、地域連携や地域貢献という形で大きな流れを形成している以上、どのような形であれ、地域の実践にかかわる研究、教育も無関係でいることはできない。これに対して、地域コミュニティの強化の流れの中で、きれいにぬぐい去られてしまいかねない地域コミュニティの暗部への視点を保持し、その圧力と恐怖を描き出し、一貫して立ち向かった吉田司の仕事を検討することを通して、新たな方法論を取り戻す作業を試みた。

ここでは、地域共同体の恐怖を見ることなく、聖化し神話化する言説の問題を明確にとらえることの含意を指摘した。そして、それを可能とする吉田司の調査方法論から受け取るべきものを明らかにした。ここで断っておきたいのは、地域コミュニティのネガティブな要素を暴露することを強く主張したいわけではないという点である。たしかに、隠蔽されたものを浮かび上がらせること

(西澤, 1996) は重要な意味を持つ。この点を確認した上で、最後に、吉田司の視座と方法論を、地域コミュニティ調査や地域での調査・実践にかかわる教育活動に対してどのように生かすことができるかという観点から考えてみたい。

第1に、地域共同体の恐怖を描き出すことは、その問題を明確にする上でも重要であるが、より本質的な問題として、暗部を描かないことによって、地域共同体の恐怖と闘う生きる実践を見落としてしまう問題を考える必要がある。吉田司の『下下戦記』について成元哲は、「地域社会から人間として尊厳を剥奪され、社会的な傷を受けた水俣病患者を、承認を求める闘争に駆り立てるものが何であったかを説明するもの」(成, 2003b: 11) と評価している。ここには、地域コミュニティの「強み」や良い点にのみフォーカスする近年の地域研究・実践・教育の視座が完全に見過ごし、そして、とらえることができない〈強み〉を見いだす方法があるのではないか。逆説的な表現になるが、地域の強みを模索するのであれば、このような地域コミュニティの暗部と、それとの闘いによって生み出された力を、〈強み〉としてとらえる手法が必要となるはずだ。

第2に、情報共同体の恐怖に対して、吉田司は次のように語っている。自由な発想が死滅しつつあるマスメディア情報共同体への対抗として、「コラージュ・ノンフィクション」の意義も、戦略的な「仮説の挑戦」にあるとする(吉田司, 2005a: 10-11)。そして、「現代の〈電子魔法〉の世と戦うために、こちらも時空を超えて対抗魔術を使うノンフィクション」さえも語るのだ(吉田, 2011: 7)。きれいな上澄みの部分をすくい上げ、地域コミュニティの強みとする言説とそれを流通させる情報共同体に対して、ひとつひとつ神話化された部分を崩しつつ、その流れに身をもって対抗した実践から生み出された言葉を再評価しつつ、対抗のよりどころとすること。地域にかかわる者として、こうした回路を担保しておくことが不可欠ではないかと考えられる。

第3に、教育、研究の現場における共同性の恐怖への対抗である。これまでも、「外部においては規範的議論に関与しながら、学会内部においては記述的議論にとどめる」という『二重帳簿』の問題(松本, 2003: 70)が指摘されたように、研究と地域での実践を関係させないま

まにとどめてしまうこと問題がある。その意味で、地域の共同体の恐怖は、何も外部のコミュニティに限らない。自身が所属するコミュニティである教育の現場でも、教育・実践の現場でも、真綿で首を締め付けられるような、全体主義的なコミュニティの恐怖にさらされてはいないだろうか。地域実践をめぐる研究教育にかかわる者として、きれいな神話に回収されずにさまざまな領域における共同性を描き出す方法、さらには、「全員参加」「全員一致」のような共同性の押しつけに対抗することが求められているはずだ。であるならば、地域を含むコミュニティの恐怖を見据え、対抗する言説を生み出していく吉田司の方法は、教育、研究と地域での実践にかかわる上で、大きな力になるだろう。

こうした仕事は、それ自体、自身が生きる地域コミュニティ、言説空間、教育・研究コミュニティを刺激し、そのリアクションとして新たな恐怖を招き寄せるかもしれない。本稿での吉田の方法論の検討は、こうした恐怖の中に身をさらすことを引き受け¹⁵⁾、立ち向かうための、研究・教育・実践の方法論を展望する作業の1つである。

付 記

本稿は、JSPS 科研16K04084(研究代表: 松宮朝)による研究成果の一部である。

注

- 1) 厚生労働省HP, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000130501.html>, 2017年9月30日最終確認。
- 2) 愛知県HP, <http://www.pref.aichi.jp/soshiki/chuiki/0000024554.html>, 2017年9月30日最終確認。
- 3) 筆者の教育実践との関連では、吉田司の水俣、三里塚の議論は地域社会学、調査方法論については社会調査法において紹介し、その含意に関する検討を行っている。また、「日本の生活文化と伝統を理解させ、それらが行動の基盤になっていることを考えさせること」を謳う高等学校公民の学習指導要領に関連した教科教育においても検討を行っている。
- 4) 後述するように、吉田司のノンフィクションに対する意味づけは、一般的に流布している「足で稼ぐ」式の現場主義とは大きく異なっている点に注意が必要である。
- 5) 文学批評同人誌『叙説』16号(1998年)の「小特集 吉田司『宮沢賢治殺人事件』は〈事件〉か?」に、吉田司に対する評価/批判のバリエーションがよく示されている(『叙説』編集部編, 1998)。
- 6) 『夜の食国』は、水俣在住中に聞き取りを行った約500本のテープをバラバラに解体し、別のストーリーに編集したもので

- あり、水俣病を生きた人びとのそのままの語りではない(吉田, 1987: 366)。これは、『下下戦記』にまとめられた内容に対する抗議故に、「ノンフィクション」として書くことが不可能になったという事情によるものである(吉田, 1997: 185)。
- 7) 石牟礼道子による『苦海浄土』と対比的に語られる『下下戦記』であるが、『苦海浄土』が正確な「語り」の記録であるか否かという観点からすれば、別の問題が孕んでいる。この点に関しては、石牟礼の作品が「聞き書き」, 「ルポルタージュ」の作法から外れた作品であることを指摘する渡辺京二の解説を参照(渡辺, 1972: 309-312)。
- 8) だから、水俣の議論が、東北の共同体の闇を描く枠組みとなり(吉田, 1987)、沖縄、宮沢賢治における神話や共同性の賞賛を解体する仕事につながっていく。ここからも、吉田の仕事が単に神話崩しというだけでなく、三里塚の、水俣の、沖縄の、東北の見過ごされた闇の言葉を掘り起こす作業として見る必要があると思われる。
- 9) もっとも、社会調査において、個人の特定がなされないためのデータを改変する方法は珍しいことではなくなっている。
- 10) だからこそ、『下下戦記』を「私の作品ではないと思いついでいた」(吉田, 1991: 412) のかもしれない。と同時に、この書の地域への影響力が問題となった際には、あえて作品を「私物化」するという戦略をとる(吉田, 1991: 414)。
- 11) 『夜の食国』にも、次のような台詞がある。「人間はね、嘘なんかつかないんですよ。人の心の中の闇にまぎれ込めば、真実なんかよりもずっとのおびきならない嘘が数々見えてくる。なら、その嘘何て言えば良いの、真実よりも重たい嘘って」(吉田, 1987: 201)。
- 12) この時期の仕事については、多くの高い評価を受ける一方で、自身にとって必然性のない仕事としていらだっていたとも述べている(吉田, 2000)。
- 13) もっとも、自身の三里塚での振る舞いについては「裏切り者」として相対化もしている(吉田編著, 2003)。
- 14) 地域コミュニティの活性化をめぐるワークショップでは、いわゆる「よそ者」「外部」であるからこそその発言を重視することがある。こうした傾向を否定するものではないが、発言する当の人物がどのような文脈を背負っているのかという点は、無視できない問題と思われる。
- 15) 吉田司自身、宮沢賢治、そして沖縄をめぐる神話崩しを書く際には、「私はとても怖かったということです」, 「書きながら、怖くしょうがなかった・冷や汗が出てくるんですよ。こういう批判が来たら、おれ、ちゃんと答えられるだろうか」(吉田・柄谷・関井・村井, 1997: 9) というように、強い恐怖の中での闘いであったことを述べている。

文 献

- 井田真木子ほか, 1999, 『ノンフィクションを書く!』株式会社ビレッジセンター出版局。
- 石牟礼道子, 1972, 『苦海浄土』講談社。
- 大月隆寛, 1996, 『大月隆寛の無茶修行 上』毎日新聞社。
- 大月隆寛, 1997, 『顔を上げて現場へ向け』青弓社。
- 大月隆寛, 2001, 『独立書評愚連隊 天の巻』国書刊行会。
- 岡本達明, 2015, 『水俣病の民衆史 第五巻』日本評論社。
- 加藤昭宏・有間裕季・松宮朝, 2015, 「地域包括ケアシステムとコミュニティソーシャルワーカーの実践(上)」『人間発達学研究』6: 13-26。
- 加藤昭宏・有間裕季・松宮朝, 2016, 「地域包括ケアシステムとコミュニティソーシャルワーカーの実践(下)」『人間発達学研究』7: 31-50。
- 『敍説』編集部編, 1998, 「小特集 吉田司『宮沢賢治殺人事件』は〈事件〉か?」『敍説』16: 72-96。
- スミス, W. ユージン・スミス, M. アイリーン(中尾ハジメ訳), 1980, 『写真集 水俣』三一書房。
- 成元哲, 2003a, 「初期水俣病運動における『直接性/個別性』の思想」片桐新自・丹辺宜彦編『現代社会学における歴史と批判 下巻』東信堂。
- 成元哲, 2003b, 「承認をめぐる闘争としての水俣病運動」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』1: 9-14。
- 西澤晃彦, 1996, 「『地域』という神話」『社会学評論』47(1): 47-62。
- 松宮朝, 2011, 「大学における地域連携・地域貢献と社会調査をめぐるノート」『人間発達学研究』2: 43-50。
- 松宮朝, 2012, 「コミュニティと排除(上)」『人間発達学研究』3: 43-52。
- 松宮朝, 2014, 「コミュニティと排除(下)」『人間発達学研究』4: 31-40。
- 松宮朝, 2017, 「地域コミュニティにおける排除と公共性」金子勇編著『計画化と公共性』ミネルヴァ書房。
- 松本康, 2003, 「都市社会学の遷移と伝統」『日本都市社会学学会年報』21: 63-79。
- 元濱涼一郎, 2012, 「記録と解釈—『下下戦記』, 『夜の食国』の二著をめぐる—」『社会学と社会の間』。
- 山折哲雄・吉田司, 2010, 『デクノボー宮沢賢治の叫び』朝日新聞出版。
- 山口由美, 2013, 『ユージン・スミス』小学館。
- 吉田司, 1987, 『夜の食国』白水社。
- 吉田司, 1987→1991, 『下下戦記』文藝春秋。
- 吉田司, 1993, 『世紀末ニッポン漂流記』新潮社。
- 吉田司, 1997, 『宮沢賢治殺人事件』太田出版。
- 吉田司, 2000, 『増補新版 ひめゆり忠臣蔵』太田出版。
- 吉田司, 2001a, 「『あなたは男でしょ。強く生きなきゃ、ダメなの』」草風社。
- 吉田司, 2001b, 『デジタル・パラノイア』徳間書店。
- 吉田司, 2002, 『新宗教の精神構造』角川書店。
- 吉田司, 2005a, 『王道楽土の戦争 戦前・戦中篇』日本放送出版協会。
- 吉田司, 2005b, 『王道楽土の戦争 戦後60年篇』日本放送出版協会。
- 吉田司, 2011, 『カラスと罽褌』東海大学出版会。
- 吉田司編著, 2003, 『聖賤記』パロル社。
- 吉田司・柄谷行人・関井光男・村井紀, 1997, 「共同討議 宮沢賢治をめぐる」『批評空間』14: 6-41。
- 渡辺京二, 1972, 「石牟礼道子の世界」石牟礼道子『苦海浄土』講談社。